

私にとって言語文化教育とは何か

一人ひとりが自分の色や考えを 出せながら気楽に話ができる風土

実践研究「総合活動型日本語教育」から

鄭 京姫

はじめに

「なんかやらなくちゃ」「がんばろう」「不安」「ドキドキ」など、いろいろな心境が初めて実習生として参加した時から絡んできていた。どこから始まればいいのか、なにをすればいいのか、私にとって総合活動型日本語教育とはなにかについて考える暇もなく実践は始まり、このレポートの執筆に当たって、私はすでに学習者として参加したことがある総合の経験をもとに、今回の動機の仮説を立てた。その理由は、私はそのようなことが総合で一番必要であると思ったし、自分にとっていい経験だったからだ。しかし、対話をし、実践の日々を重ねながら、私の仮説は変わっていた。私の初めての実践と対話をもとに、今回の私にとって総合活動型日本語教育を語りたい。

1. 動機

ちょうど昨年の今頃、私は『日本事情・文化』¹⁾ (以下 NJB) という「総合活動型日本語教育」にはじめて出会った。その時は、「総合活動型日本語教育」という概念より、早稲田大学の日本語教育センターでの科目の名称としての「総合」のイメージしかなかった。

当時の私は、私にとって魅力的な人を探し、インタビューをするその授業が楽しかった。— こんな授業があったのかな・・・と思ったぐらい、今まで受けて来た様々な授業とは違うすべての初体験でうきうきし、レポートを完成した後は達成感まで感じた。が、そうにもかかわらず、私にもし、もう一回授業を参加しないか、と誰かの誘いがあったとしても首を横に振ってしまいそうなのはどうしてなの

1) 「日本事情・文化」略 NJB。学部生向けのオープンキャンパスの授業である。この活動では、「私にとって魅力的な人」を探して、動機を書いてインタビューし、レポートを書く。

か。レポートを書きたくないから。魅力的な人がいないから。何回も繰り返し同じ文を直さないといけないから。いや、その理由は、ひとつしかない。それは人のレポートに関してコメントをすることである。

この総合活動型日本語教育（以下総合）では人の文章に関してコメントをしなければならないし、そのようなインターアクションがないと「総合の授業」は成り立たないと言う。しかし、人の文章を読んでコメントをすることはそう簡単なことだとは言えない。その時の私も、これ言っているのか。いいことだけ言ったほうがいいのか。良くないと指摘したほうがいいのか。感想を言ったほうがいいのか。どうコメントすればいいのかさっぱりわからなかった。しかも自分のレポートに追われ人の文章まで、気を使う余裕なんかないと思った。軽く目を通すだけでも十分だと思ひ、学校へ行く時、人ごみの電車の中で読み、授業では「ええっ、ここがよくわからないのですが。」とか、人が話したことにならずきながら、一言も発言せずに授業が終わった日もあった。

ある日、一人の先輩が私のレポートについてコメントをしてくれた。その時、私が悩んでいることや、考えてはいたけど書きたくなかったところまで指摘された。まさに、私の心境を拡大鏡でみられたようだったけど、不愉快でもなく、むしろ心の中がすっきりした。その人は私のレポートを真剣に読んでくれたという事が心から伝わってきたからだ。私は始めてコメントをし合う意味が分かった。その後から、私のレポートは人々の意見を貰い、自分と向き合いながら次第に完成度を高めていった。そして私も、人の文章を読む時は自分のレポートより倍以上の時間をかけ、繰り返し読んで、考えて、責任を持って話すように努力した。

確かに人の文章を読んでコメントをすることは難しい。今回、実践の授業でも学習者同士はお互いの文章に関してコメントを行うことがめったにない。多分、学習者同士も、どのようにコメントすればいいのか分からない状態かも知れない。私はどう支援すれば良いのだろうか。学習者から言葉を引き出せるために「いま、00さんのレポートを読んで、00さんはどう思いますか？」と聞きたくもない。それは、かつて私が行ったのと同じく目を通した後の感想を、ただその場を乗り越えるために、誰かのレポートに関してコメントを求められたから答える「ワード」としての言葉を用いるかも知れないから。そうではなく、私は学習者の心からの「ボイス」としての言葉を引き出して、そして、学習者同士がお互い遠慮せず、言葉を交わすことが出来る教室というコミュニティを作りたい。学習者同士の心からの話し合いこそ、お互いの考える力も育つことになるし、コメントをし合う意味でもあるから。

私にとって総合活動型日本語教育とは学習者同士が「ボイス」としての言葉を交わせるコミュニティである。

2. 対話

対話の日時：平成 16 年 11 月 17 日～19 日

対話の相手：村上まさみさん（早稲田大学大学院日本語教育研究科 言語文化教育研究室 6 期生）

「村上さんじゃないとダメですよ。」私は村上さんにこう言いながら対話を申し込んだ。何故ならば、村上さんは動機文の中に書いてある、あの先輩でもあるし、私はいつも丁寧にコメントをする村上さんへのあこがれもあったと思う。現在、今回の総合のサポーターとして一緒に参加していて、すでに総合の実習を終えた村上さんといろいろな話がしたいと思い、対話の相手として村上さんを選んだ。

2.1. コメントというのは。

■ コメントはやり取りの中から。

姫：私がおかを言おうと思ったのに、他の人が私よりいいコメントをしたり、私が考えていたことと違うことを言うと、言えなくなったり。よけいそれがプレッシャーになって、自分自身をできない人だと責めたりしてしまうこともあります。そうなるコメントができなくなる。また私は、これはこの人に言っているのかを先に考えます。

村上：私はあまり考えないな、学校では。少なくとも、早稲田の教室の中では、ある目的で勉強のために集まっている人だから。私にはその人がどんな人か関係ない。すごく汚いことばを交わせないという最低限の礼儀が保たれていれば何でも言っているはずじゃないかな。

姫：でも、キツク言うつもりではないけど、指摘のようなコメントになってしまったり、相手にキツク伝わる時もあると思います。いつか、私は誰かにコメントしたことがその人をすごく傷つけたのではないかと。その時、相手は私と目も合わせてくれなかったし、多分、私のコメントで相手の顔色

が変わってしまったことも気になって。それがトラウマになった気がするし。

村上：でもね、多少、それはしょうがないと思うよ。多分、私と姫ちゃんはなにかの波長があうから、言われたことがキツイと思わなく、素直に受け入れたかもしれない。私も姫ちゃんに言われるコメントは嬉しいし。でも、すべての人がそうじゃないし。これはなんか、楽しく、心地よい時間を過ごそうと思えば簡単なかもしれないけど、私たちは何のためここに集まっているのか。そこのところでやっぱり容赦していると面白くないよね。みんながみんな同じ強さを持っていないから、言葉の選びはあるかもしれないけど。1対10、1対20のやり取りの中で、10とか20の人たちはみんなそれぞれ違うと思うし…。

どうしてコメントをし合うことに意味があると思うようになったの？

私が姫ちゃんにコメントをして、良かったというのは、ある意味一方通行じゃない？

姫：いろいろな人からコメントを貰って、もう一度、自分で考えていくことで、一方通行ではないと思うけど。

村上：もう一回、自分に問い直すことだね。でも、やっぱり、一方的な働きではない？

自分にとってコメントってどんなものだった？

姫：私にとってコメントは、AとBがあるとしたら、Bは出すけど、Aは思っ
ていても出したいくない。もしくは、自分にすらわからなかったことを、コメント
を貰ってもう一回考えることができることかな。考えが広がったというか。

村上：すべての人から発せられるものがすべてではないよね。ことばのやり取りは捨てるほどあるけど、その中で自分にとって残るコメントはあるはず。やり取りの中で自分にとってのコメントを見つけていくのではない？ いったいコメントってなに？ コメントは言えればいいもんじゃないし。「これがコメントだな～」と、パッとくることばは、やり取りの中から生まれてくることばだと思うよ。

総合では、皆が共通で持っている作品で、作品を読んでそれを媒体にして次第に自分にとって意味があるのを少しずつ残していく。だからコメントをし合うことが目的ではない。

「コメントはやり取りの中からだ。」という考えに私はびっくりした。私にとってコメントとは、「コメントを言う」ことであつた。相手にアドバイスをする、相手

の何かに関して指摘をすることだと認識していた。そして、コメントは相手の考えに影響を与えたり、相手との人間関係にもかかわるので責任が必要であり、難しいとずっと思っていた。そして、いつの間にか、相手に「いいコメントを言ってあげなければ。」という考えに縛られていた。

村上：私にとってコメントというのは、相手に投げっぱなしのことば。コメントは言うのが難しいのではなく、コメントを聞くのが難しいと思うよ。コメントって基本的に言っぱなし、書きっぱなし。

姫：責任感がなくてもいいですか？

村上：そういうコメントでも心に入ってくる時もあるんだよ。考える時は考えるんだよ。そういうコメントがじゃなくて。それは、コメントを聞く人のキャパシティーでしょう。コメントって何？本当に必要なの？

姫：確かに総合の授業では必要ですし…。

村上：(総合の授業でコメントが必要だということを) 誰が言っているの？

姫：・・・。

『この総合活動型日本語教育では人の文章に関してコメントをしなければならぬ』私の動機の中に書いてある部分だ。村上さんは私に、「誰が必要と言っているの？」と聞いたが、私は正直に答えられなかった。誰も言うてはいない。しかし、私は総合でコメントが必要であると書いた。どうしてか。自問自答を繰り返して得たことばは、私は、そのNJBの時、「コメント」として発言をしたわけではなく、みんなとやり取りをしていただけなのである。みんなと話をしながら、そこで私にとって意味のある、又は今一番心にぐんときた言葉を拾って、いま、私にとっての「良いコメント」として「吸収」していたのだ。確かにコメントとは「よーい、スタート」と、ゴングを鳴らして始まるものではないのだから。

■ コメントは誰でもいい

村上：どんな場合にコメントをし合うことだと思うの。

姫：ある学習者が話した時、実習生かサポーターが真ん中でいろいろ工夫をして振ることがなくても自由に話が出来た時、学習者がお互いに考えて、話していく時、その時はコメントのし合いが行っている気がします。コメントをし合う意味があるというか。

村上：コメントは誰でもいいじゃん。どうして学習者同士なの？

姫：私はもう総合をやって、いい方向にレポートを書いたので。自分にはすぐ

くプラスになった活動だったので。その時、学習者との話し合いで自分がいろいろ考えることができたので、こういうふうにいけばいいのかとずっと思っていて。前、NJBの時も、TAに指摘されたところはなぜか、直さないといけないかなと思って。そのときの一言は考えたいという自分からの働きより、考え直さないという義務感のように思ってしまった。実習生かサポーターがたくさんコメントをするとそれはある程度、パワーがあるようで。

村上：その時、私は、実は、支援者²⁾として、総合の授業に仕組みられていたのよ。そのとき、「私は支援者だ」という考えをしてなかったけど。だから、姫ちゃんが感じたいいいコメントができたと思わない？もし、私が私を支援する人だと思ったら、姫ちゃんが感じたようなコメントができたと思う？実習生もサポーターも学習者も私は分けないな。一緒に参加して、話し合うことに意味があるのではないかな。

村上：TAには二つの目があると思うよ。一つはコースの流れを頭に入れること。そうすれば目指すものがわかっていける。それで、グループ全体を見ながら観察する、いわばティーチャの目で、もう一つは作品そのものを読むときの目だよ。この目はその人が書いたところが知りたい。その人と話がしたい、伝えたいという目なの。だから、この二つの目は全然意味が違う。

私は自分が実習生として学習者にコメントをすることをある意味、学習者は指摘・修正されているのではないかと勝手ながらそう思っていた。赤ペンは手に持っていないけど、先生という立場にいるとその一言は特別な意味を持っているようで…。また、支援者とは、村上さんが言うようにクラスの活動が活発に動き出すきっかけという考えより、「支援」という言葉で、何かを与える存在として、学習者と支援者という格付けをしていたと思う。その結果、私は二つの目の中でもっばらティーチャの目の方に偏っていたのだ。そして、作品そのものを読む目は持ってなく、ただ、ティーチャの目で作品を読んでいた。確かに。

2)ここで村上さんが言う、「支援者」として仕組みられているという意味は、「総合」の実習にも出ている院生は、「活動」の仕組みを知っている状態で、NJBに出席している。つまり、総合型日本語の教室で、どんな風に学習していけばいいのかわ知っているということであるという。

再び、ここで村上さんが大切なことだと言っていることは、「支援者」の役割は、あくまでクラス活動が活発に動き出すためのきっかけ作りとなる発言をする役割が期待されていたという程度であると言う。「総合」のクラスとNJBクラスの違いは、ここが大きく違い、総合クラスでは、「実習生」は、「支援者」として臨むけれど、NJBクラスでは、そういう人がいない。しかし、同じ立場で臨んでいるにも関わらず、「院生」は活動の進め方を知っているということであるとも言える。

2.2. 総合での活動で

■ 遅れていると感じる必要がない活動だよ。

姫：受講生と同じ立場でいたいスタンスだけど、なぜか、他の実習生の方と「どうしようかな」と相談しながら話しているうちに、たまには受講生の背中を押さないといけないのかと思ったりします。遅れている学習者は自分が遅れていることを気にしていることではないのかと思ったり。

村上：確かめたの？総合は遅れていると感じる必要がない活動だよ。なんか、これからの先、コースどおりのこと（をしなければならぬということ）がすごく気になっているんじゃない。

スケジュールを型どおりに追うことが気がりになっているのではないのかという村上さんの問いに私は確かにそうであると自分自身の心の中で認めていた。

姫：実は、ひとりの受講生が総合をやめた時、その時からいろいろ考えていました。なにかストレスがあったのかなと。この人も辞めちゃうのかな。何かストレスがあるのかなと。

村上：何人だってやめていい。合わない人は合わないと思えば。でも、去りっぱなしだけではなく、いつかは戻ってくる人もいるだろうし。「ちょっと我慢しててね。やればいい事があるんだよ。いい活動なんだよ。」と言いたくないな。

自分の意思で辞める選択をした人を考えるよりは、いまの人たちを知る行動をしたほうが建設的じゃないかな。

総合の教室には一人ひとり違う人達が集まっている。私はその一人ひとりを同じ箱に入れていたわけではないけど、活動が遅くなったり、レポートを書いてこなかったりと、BBSに入らないとなにかストレスがあるのかな、と不安になってしまう。確かに、辞めた人を考えるよりは、今、一緒に教室で活動している受講生をみたほうがいいのかも。しかし、私はやめた人がどうして辞めて、どんなことが足りなくて辞めたのかも考えていきたい。そして、「やめたい」と思わない教室環境を考えていきたい。いつか戻ってくる人が、その時は居心地よくいてほしい。それは、学習者はみんな同じではないことを認めながら、それぞれの色や考えが自由に出ても良い環境かもしれない。10人10色があっても良い教室環境。

■ 動機の意味

姫：遅れている人がいて、BBSにも入らないし、話さないし、動機をどうして何回も直さないといけないのかと言いながら皆がコメントしてあげても、直さないし。

村上：直すものなのかな・・・。

姫：えっ？

村上：直すということは足りないところ、間違えているものを正しい方向に持っていくことであるし。動機って直すものなのかな…。

姫：私は、もちろん、言葉で、ここを直しなさいとかは言わないけど、動機が一番大事で、動機をしっかり書かないと対話になかなか進めないし。私は総合の仕組みをそう理解しています。

村上：動機って最初を選んで自分の気持ちだと思うよ。自分の中身を誰かに直してもらった、直さないとならないと思った人は去っていくだろうし。でも、やっぱりどうしたら自分の言いたいことをわかってもらえるのかな。だからこそ考えるし、だからこそことばを選んで、必要なかった部分は自分で選んでいこうし。ことばを増やせることと、ことばを削られていくこととは違うよ。

例えば、私が書いているものを否定されている気持ちになって、コメントを受け付けないと「ボイス」としてのコミュニティが交わせなかった？

ボイスということは、いや、学習者からの声は、彼らの心からの声ではないかな。それが「ワード」ということばであっても。学習者の声から出たことばはすべて学習者のことばであると思うよ。動機というのは学習者の表現なの。だから学習者は自分の中で解決していく…。その経緯の中で、私も直された意識はなかったけどね。

動機のための動機じゃなくて。動機を書くために一番必要なのはことばをねるための深さを味わうことではない？

私は、初めての総合の授業で自分がいろいろ考えることができた。同じ教室にいる学習者同士のインターアクションで自分が考えていること、考えていても外に吐き出したいことを言った瞬間心がすっきりした。これは相手が私の書いたレポートを真剣に読んで、考えてコメントしてくれたからだと思っていた。いや、信じきっていた。そして私は「ワード」と「ボイス」という風に学習者のことばを分けたのである。心に響かないようなコメントは、ただ言葉を並んで言うだけの「ワード」

と言う言葉に名づけ、また学習者同士がお互いのレポートを読んで、考えていることを遠慮なく言うことが「ボイス」と思っていた。しかし、学習者の声から出ることばは、学習者の表現は、すべて学習者の声として、学習者のことばであることが大切なのだ。動機を書く時、言葉をねるための深さを味わうことが一番この総合の魅力でもあるのである。私はその味を味わえるような環境を作ったのだろうか…。

2.3. 風土

姫：今日、一人の学習者が、検討している学習者に「あなたの動機文で書いた内容がよくわからない」と言ったら、そのコメントを受けた学習者がどうして分からないのかと、どうして何回も動機文を直さないといけないかと、ある意味、キレタと言うか。

コメントをした人してみればせっかくコメントをしてあげたのにもったいかもしれないし、コメントを受けた人はどうして私が言ったことがわからないのとキレタ態度を見せて、コメントをしてくれた人とも目を合わせようともしないようで。そうすると、周りの人たちは話ができなくなる雰囲気にもまれてしまっている。その時の集まった人によって違うのかな。

村上：ううん。それは、支援のまわしだと思っよ。風土というかな。

姫：はい？ふう…ど？

村上：風…土（村上さんは丁寧に紙に書いてくれた。）

暖かい。じめじめする。雰囲気を作る土地柄というかな。畑にどんな土が入ったかによって、実る野菜・果物も変わるし。そのグループとか教室にどんな土を入れるのかは支援する人がどんな土を入れるのかによって変わると思う。

この場ではこのようなのが話題になっているんだ。例えば、飲み会で、音楽が好きな人が集まっている時、何気なく普段、音楽にあまり興味がなかった人でも、その話を聞いたり、話したりするじゃない？

TA側が形式的なことを指摘していけば、指摘的になる。そのグループでは、どんな読みあいをするのか、支援の側が最初から自分の中でも発信していく。

姫：すごく難しいと思うけど。

村上：すごく難しいけど、すごく面白いと思っよ。

土を耕す。自分が土にならないと。耕される土は痛いけれども、くわをさしこむよりは混ざる側にいたい。どんなことがそこで起きたら姫ちゃんとしては良いと評価すると思うの。自分がその場を受け入れることができれば。

どんな、教室活動が見えてきたかとか？

姫：「質問—答え」ではなくて…。皆で話ができるとき、笑ったり、考えたり。

その時は満足かな。

私は、自分が実習生とかサポーターということを考えずに、仲間の一員として共に考えたり悩んだり、みんなと話をすることで私らしくいられると思う。私の教師としての信念は教えることではなく共に学びたいことなのだ。

3. 結論 — 私の風土を探して

かつて私が感じた総合は誰かに考えさせている感じがしなかった。ただ仲間と話しながら、仲間から貰ったコメントをもとに、自ら絶えず考えていくことであった。だから私は総合に惹かれていた。そして、そのためには学習者同士のコメントのし合いが一番理想的であると思い込んでいた。

村上さんとの対話の中で出てきた「二つの目」という言葉を聞いて、私はすごく自分自身が恥ずかしかった。何故ならば、私は学習者が書いた作品を読むとき、ティーチャの目しかもってなかったからだ。学習者が書いているレポートと一緒に読みながら、一緒に考えながら、一緒に話し合っていく、「共に学ぶ仲間」という考えより、良いレポートを書かせることだけに目が向いていた。そして、それが支援であると思い込み、ただ学習者同士のやり取りだけを期待していたのである。

正直に実践が始まってまもなく、私は実践に臨む自分自身に苛立てていた。「私はもしかしたら日本語教師に向いてないかも。」「私はこれでいいのか。」など、はっきりとした原因もよくわからないままいろいろと悩んでいた。そして、対話をして私はある一つのことを自分が忘れていたのではないかと思うようになった。それは「私はどうして総合がよいと思ひ、また自分はどのような日本語教育がしたいと思ったのか」、である。それは、共にレポートを読み、考え、話し合う「仲間」という考えである。その「仲間」の中は、学習者同士だけではなく、総合で参加して、ある共通の作品を読んでいる人たちである。教師であれ、学習者であれ、支援者であれ、実習生であれ、お互いの仲間同士が作り上げていくこと、そして、何かを与える・貰うという関係ではなく、共に学んでいく日本語教育がしたいのだ。

そして、そのような日本語教育・総合活動型日本語教育のために一番必要なのは私にとってなんだろうか。

『風土』

村上さんとの対話の中で出てきたこのことばはその対話を終えてからもずっと、頭の中から離れることがなかった。私にとっての「風土」とは、「私にとっての総合活動型日本語教育とは」を定義していく前に、私は自分にとっての「風土」に関してこれから考えていかないといけないと思った。何故ならば、私が対話の中で感じたことは、この「風土」と関係があるのではないかと思ったからである。

コメントということはなんだろうか。ただコメントが出来る、出来ないとかではなく、この「風土」に結びついていることを、対話を通して感じる事ができた。

最初の動機の段階での私は、「ワード」と「ボイス」という風に学習者のことばを分けた。そして心に響かないようなコメントは、ただ言葉を並んで言うだけの「ワード」と言う言葉に名づけ、また学習者同士がお互いのレポートを読んで、考えていることを遠慮なく言うことが「ボイス」だと思っていた。しかし、この二つは区別すべきでも、区別できるものではないことである。何故ならば、どちらも学習者の声、ことばであるからだ。そして、そのことばを練るための深さを味わう環境が一番必要であることだ。そのような環境では、学習者一人ひとりがお互いに遠慮なく話せることで自分の色を出せる。そして、その中で自然にやり取りがありながら、コメントということも生まれてくるのである。

私は今回の対話と実習の経験で自分にとって、「10人10色」「みんな一人ひとり違う」という事を土台にして、色も性格も考えも違う人たちがみんな同じ方向に向かっていくことを目指すのではなく、その一人ひとりが自分の色を輝ける教室の風土を考えてみたい。それが「10人10色」という私の定義であるし、私しかできない風土になるのだろうか。そして、私にとって総合活動型日本語教育になっていくのだろうか。それは、今回、実践に参加して考えたことでもある。

今回、私が実習生として参加したグループは最初、受講生6人と、実習生・サポーター3人で9人であった。その中で、私は3人の学習者からいろいろ考えさせられた。この3人はいわば、うまくいかなかったケースである。

■ レベルの差は関係ない

今回、最初の動機の段階で総合の授業をやめた受講生がずっと気に掛かっている。レベルの差でプレッシャーを感じて、もっと文法や、語彙の勉強をして、再度また参加したいというその受講生のことを私は実践が終わりかけている今も尚、どうして止めたのか、なにが足りなかったのかを考えているのである。

レベルの差は仕方ないのだろうか。いや、教室の中では、レベルの差は関係ない。ある共用の場である教室では、レベルの差を感じなくていいはずだ。しかし、その

受講生は「ごめんなさい。」という言葉を残し総合を去っていった。多分、その原因は自分にあると思う。その受講生がストレスを感じたのは、本人のレベルが低いから話しが出来なかったのではなく、その雰囲気の原因があったからだ。それは、話せる雰囲気、風土がなかったからかもしれない。その受講生がもし、総合に戻ってきたら、その時はもっと楽しく、話しが出来る教室になっているはずだと、そう信じている。それは、本人の文法や語彙が豊富になってきたからではなく、教室の「風土」が成り立っているから。きっと。

■ 喉が渴いたら自ら水を飲めるように。

「どうして動機を何回も直さないといけないですか。」

最初、その受講生の反応で「えっ、いまさら何で」と、正直に思った。いまは動機を終えて、対話をするところなのに。授業が終わってから個人的にその受講生と話をすることも試みた。納得させなかったからだ。しかし、いま考えてみると私は大事なことを忘れていた気がする。馬を水があるところまでは連れて行けるけど、無理やりに飲ませることはできないことだ。

早く水を飲んで帰ろうともいいたくない。お尻をムチで叩きたくもない。その受講生が自分で喉が渴いて水を探し、飲めるようにするしかないのである。このような風土であろう。考えさせる環境ではなくて、考えさせられる教室ではなくて、自ら考えていく環境、雰囲気。そういう風土を目指したい。

■ 「ぶっちゃけ」話せる

ある日、実践報告の時、あまり自分の事を言わない受講生のことを言ったことを覚えている。

その時の私は、それは、その受講生自身のプライバシーだから言いたくないと信じきっていた。

ある日、その受講生の対話の相手と私と3人で、カフェで対話をした時に、彼女は色々で自分の事を語ってくれた。本当にぶっちゃけ…。しかし、教室に戻ってきて、対話報告の時は、その話はなかった。「いろいろ話をしたじゃない」と彼女に尋ねると「そんなことも言うのですか？」という反応であった。

「えっ、どうして」私と教室を抜けて、カフェで話をしただけじゃない。私は教室でもカフェでもその受講生の話を聞いたはずなのに。教室とカフェではなにが違うのか。カフェで、その受講生は録音テープを2つ使い切った後も、自らいろいろ話をしてくれた。

同じ実習生のSさんの話が心の中を響かせた。「あなたは言える環境を作ったんですか。」

言える環境。何でも言える環境。いくら言いたいことがあっても、言いたくない雰囲気は確かにあるし。そのような雰囲気だったのかな。私は言える環境を作りたい。みんなが気楽に、居心地よい雰囲気に包まれて。その中で学習者は、自らの色を出せながら、仲間とやり取りをしながら言いたいことを言うようになるのである。

4. 終わりに

初めてなにかをやらうとする時、その「初め」という言葉は、緊張、期待感、または不安も感じさせる。今回、「初実践」であった私は、実践の前にすごくドキドキしていた。何かを支援する立場という、何か相手に与えないという風に思っていたのである。そして、頑張らないといけないのではないかと思ひ、いつの間にか肩に力を入れ、気取っていた。そのせいか、一時期は自分にとって「教師」ということは合わないのではないかとも思った。そして悩み続けていた。

もうすぐ、私の初めての実践が終わろうとしている。私はこれから、また色々な実践に参加しながら、絶えず勉強しながら、また悩みながら、考えながら自分にとっての風土を作っていくだろう。私に「風土」ということを気づかせてくれて、その風土探しに足を一步踏み出すことができるようにしてくれた村上さんに心から感謝したい。そして、細川先生ならびにNSPJのメンバー達と、一緒に実践ができたことはとても光栄であった。また、グループ4の「美女と野獣」の美女達と、辞めたけれども私たちと一緒にスタートを切った野獣、心強かった狩野さん、優しい和田さんと総合で出会えたことを大変嬉しく思っている。

「ありがとうございます。」という気持ちをこのレポートを借りて伝えたい。

2005年が幕を明けた。

これから私はどのような「風土」を作っていくのだろう。

私は新たな心で胸がいっぱいだ。